米欧亜回覧

第７７号
発行
特定非営利活動法人
米欧亜回覧の会
編集委員会

新プロジェクト好評のうちに始動、二十周年記念事業の企画も膨らむ

七月の全体例会で発議された新プログラム「i-Café-music」と「i-Café-lecture」は好評のうちに始動し、日比谷で、奥沢でと次々にコラボレーションの動きがひろがりつつある。

設立二十周年の記念行事についても企画段階での話し合いがもたれ、Aプログラムとしては人物論について早くも一部試作品が提出され、さらにはコラムでも取り上げられた「ヴァーチャル・ミュージアム」もメディア委員会で検討課題となり、試案が提出される動きとなっており、今後の展開が期待される。

また、Bプログラムの近代日本をテーマとする研究グループも、小委員会を立ち上げて討議を重ねており、テーマに合った外部講師を招いた一年ないし一年半の連続セミナーを経て、記念のシンポジウムを開催する、「セミナー＆シンポジウム」の案に固まりつつある。

新年には企画案がまとまり、具体的にスタートする運びになってきた。このプロジェクトにはなるべく多くの会員に参加してもらいたいので、志望者は事務局またはプロジェクト担当者にご連絡いただきたい。

新年会の演出決まる
ヨハン・シュトラウス二世のミニ・オペレッタ特別上演！

二〇一五年の新年会の内容の企画・演出が固まった。

一部は、挨拶や乾盃のあと、飲食・歓談を楽しみ、二部では、岩倉使節団とゆかりの深いヨハン・シュトラウス二世の喜歌劇「こうもり」のミニ版が、声楽家とヴァイオリニストのゲスト出演四名、そして植木さんのピアノと当会メンバーによるコーラス隊で演奏される。

会場は、有楽町の日本外国特派員協会（外国人記者クラブ）、時間は、十二時三十分から、会費は八千円、家族割引もあり、お誘いあわせの上、奮ってご参加ください。

全体例会（10月26日）

十月全体例会開催
平川祐弘氏講演―岩倉使節団はどのような西洋知識をもって米欧回覧に向ったか―

十月二十六日、学術総合センター会議室で、第七十三回の全体例会が開催された。第一部は、会務報告の他、泉代表から、i-Café-musicおよびi-Café-lecture、そして、設立二十周年記念事業を視野に入れたi-Project・20の、三つの新しいプロジェクトについての位置づけの説明が行われた。

第二部は、東京大学名誉教授の平川祐弘氏を講師に招き、「岩倉使節団はどのような西洋知識をもって米欧回覧にむかったか」をテーマにした講演会が行われた。平川氏は、『実記』の日英版の対比やスマイルズ著「西国立志篇」の和訳などの資料を用意され、ご自身の戦後六年間にわたる欧州留学の経験と重ねて、懇切な講演をされた。

（詳細は二頁）

東京のど真ん中に「米軍専用施設」？！

泉 三郎

最近、知人から薦められて、矢部宏治氏の著書「日本はなぜ、『基地』と『原発』を止められないのか」を読んだ。これは我々の拠点とする国際文化会館の直ぐ近くに「治外法権」の空間が厳然と存在していることを教えてくれた。

それは、米軍専用のヘリポートであり軍専用のホテルである。ヘリポートは国立新美術館の隣りにあり、ホテルは天現寺の近くにある。米軍の基地といえば沖縄を連想するが、首都圏だけでも横田、厚木、横須賀基地などがあって、その極めつきが前記の施設ということになる。米国の軍人や関係者は、横田まで飛来して、そこからヘリコプターで六本木に舞い降り、車でニュー山王ホテルに入ることができる。その間に関所はない、フリーパスだ。そしてそのホテルでは、日本の外務、防衛をはじめ関係省庁の高官らと在日米軍のトップから構成される「日米合同委員会」が毎月のように行われているのだ。

私はその二つの地点を歩いてみた。一見して唖然とした。そしてかねて承知していた、広大な敷地をもつ米国大使館の官舎群に足を伸ばした。そこには進駐軍時代を彷彿とさせるバラックハウス的建物群があるのだ。私は粛然として言葉もなくその界隈を歩いた。

すると赤坂氷川神社の前に出た。あの勝海舟の旧宅があったところだ。そして史跡を示す銘板を見ながら、勝と龍馬のことを想起していた。幕末、結ばれた「不平等条約」が幕末維新の志士たちにとってどれだけ屈辱だったか。「治外法権」ほど我慢のならないことはなく、これがバネとなり「真の独立」を目指して、動乱を生き抜き維新を成し遂げ、乾坤一擲の「岩倉使節団」を派遣したのではなかったのか。

ああ、それなのに、それなのに・・・。

われら戦後の民は、七十年を経ても「治外法権」を許してのうのうとしている。その謎、悔恨に満ちた複雑なからくりを、平易に明快に解いてくれるのが、矢部氏のこの「志高き渾身の書」なのである。是非一読を薦めたい。

第73回 全体例会

平川 祐弘 氏講演
岩倉使節団はどのような西洋知識をもって米欧回覧に向かったか

十月二十六日、第七十三回の全体例会が一ツ橋の学術総合センター会議室で、開催された。司会進行は近藤事務局長。

全体例会の部

第一部の会務報告では、まず、泉代表から、以下のような新しいプロジェクトについての総括的な整理があった。すべての頭文字につけたi（アイ）は、岩倉ミッションのi（アイ）で、i-Café-music（アイ・カフェ・ミュージック）は、親しみやすい音楽を媒介として、映像や軽飲食を楽しみながら岩倉使節団や米欧回覧実記を広く知らせる活動。i-Café-lecture（アイ・カフェ・レクチャー）は、映像を中心にした使節団・実記の紹介を通して会員拡大につなげる活動。

第２部・平川氏講演（10月26日）

i-Project・20（アイ・プロジェクト・トゥエンティ）は、二年後の設立二十周年事業を見据えたプロジェクトである。使節団は全百七名で横浜を出港したが、途中参加や帰国もあり、使節本隊、各省派遣組、後発組、随行留学生組を含め人数は変化している。DVD「岩倉使節団の米欧回覧」には、使節団に係わった日本人百人、外国人三十六人の写真付き群像のアルバムが添付されているが、i-Project・20では、まず、これを拡大・発展させて、使節団に係わった人を最大限網羅する人物録を作ろうという、プロジェクト（A）が小野幹事を中心に進行している。

さらに、人物論の視点から使節団そのものの意味を問い、近現代史の再評価にまで及ぶプロジェクト（B）の計画もすすめられている。

すでに実施済みあるいは進行中のi-Caféについては、岩崎幹事および植木幹事から詳しく紹介があり、続いて部会報告が行われた。

講演の部

休憩を挟んで、東京大学名誉教授で、比較文化史の泰斗である平川祐弘氏による講演会に移った。

講師の平川祐弘氏

◇講演要旨

私は、敗戦国の貧乏留学生として、戦後六年間ヨーロッパにいた。英語、仏語、独逸語を学んでいたが、西洋知識を一番吸収したのは何と言っても日本の書籍、新聞を通してである。森鴎外や夏目漱石の西洋体験を自分の先行体験と考えていた。

ヨーロッパには学ぶべきことが実に沢山ある。当時、大使館に仏語ができる人がいなく、国鉄代表団等の技術通訳をしていた。こうした体験から明治の先輩の体験を振り返るようになった。一年遅れて留学してきた竹馬の友、芳賀徹氏にルノーのエンジニアの通訳の仕事を紹介したことがある。芳賀君は九十三年前に渡った「大君の使節」の通訳、福沢諭吉のことを中公新書に書いて名を挙げ、『実記』についてもルノー工場の通訳経験を下地にして、この方面の最初の実質的な研究者となった。

国鉄代表団は実によく働いたが、岩倉使節団はどうだったか。公式記録である『実記』の特色は何かというと、他の東洋人の西洋旅行記や西洋見聞記と違って、西洋産業文明の実態が極めて詳細に記録されていることである。久米邦武は、技術知識のある人が読めば分かるかもしれないので、実際に見たものをそのまま記述することに徹底した。明治もこういう風にして近代化した。実に詳しく書かれている工場見学の一例として一八七二年十月三日マンチェスター綿花紡糸場があり、英訳版と対比させてみる。技術知識のない人は良く分からないと思うが、英訳者のグラハム・ヒーリーは、本当に綿花工場に行って詳しく調べているので翻訳できたのだと思う。

使節団は、何故、これほど工場の見学に勤しんだか。彼らの念頭にあった二冊の本は、推定では使節団が出発する前の二大ベストセラーであったに相違ない。それは、福沢諭吉「西洋事情」とスマイルズ　中村正直訳「西国立志篇（原名、自助論「Self-Help」）である。

中村正直は福沢諭吉より三歳年上で、幕府のアカデミアである幕末の昌平黌の教授、当時の最もえらい漢学者であったが、密かに蘭学をやっていた。徳川幕府の最初の英国派遣留学生十四名の副取締役として一八六六年に同行し、イギリスでの体験と、帰ってきたら江戸が東京になっていたことで、二度のカルチャーショックを受けている。日本で最初に英語の本をまるまる翻訳したのが「西国立志篇」である。西洋は偉大である、その背景はキリスト教であると考え、明治天皇もキリスト教に改宗すれば文明開化ができるなどと言ってしまっていた。

「西国立志篇」の書直しは、織機王・豊田佐吉、陶工・柿右衛門などの通説となっている伝記に非常に多い。

産業化は軽工業から出発すると考え、殖産興業には技術が比較的単純で投下資本量も少なくて済む繊維産業が大切と考えていた使節団は、「西国立志篇のヒースコートの伝記をよく心得ていた。一九三四年に出た久米邦武「九十年回顧録」には、木戸孝允の「此の機械は外で模造するものはないか」という質問が記述されている。日本はイギリ

スの産業革命の成果を追いかけ追い越そうとしていたが、イギリスは、日本が模造した時には更に先の地点にいると考え、問題にしていなかった。米欧回覧についての本はたくさんあるが、応用技術の研究の決定版は未だない。

講演後、質疑応答が続き、「新世界菜館」に場所を移した懇親会は、さながら「第三部」となった。

（文責）中山 進
（写真）近藤 義彦

i-Café-music第二弾シェア奥沢で十月からスタート

五月に江古田のクライネス・ウィーンでスタートした i-Café-musicは、「DVDが泉さんの解説と相俟って岩倉使節団の意義が理解できた、森美智子さんのソプラノ、植木園子さんのピアノによる関連の音楽が素晴らしい、ワイン・軽食を入れた懇談会が楽しく、人脈が広がるのが嬉しい」との感想が多く、会員増加にも繋がっているのは、嬉しい限りです。

シェア奥沢第２回（11月30日）

この企画は継続的に多地域でも開催して行くことになり、世田谷のシェア奥沢と共催の形で、十月から三ヶ月の予定で開催することになりました。シェア奥沢は、オーナーの堀内正弘氏が、築八十年の木造住宅を修復して、「ご近所さん」のコミュニティ活動に提供しているもので、映像・音響設備が整い、パーティー用のキッチンがあり、ボランティアのキッチンマスターによる軽食の用意も可能という、i-Café開催には願っても無い施設です。また、独自にフェース・ブックやご近所さんへの口コミで集客も手伝ってくださり、十月、十一月とも満員の盛況でした。

当初は、十月米国編、十一月英仏編、十二月独・露他編と三回で完結予定でしたが、十一月開催直前に嬉しい「異変」が起きて、急遽フランス編を先送りし、一月十七日（土）に四回目を追加開催することになりました。

十一月は、日本公演のため来日中の、ロンドンで活躍中の気鋭の若手チェリスト伊藤悠貴さんが、多忙な本番の合間を縫ってi-Caféに賛助出演してくれたことにより、英仏編に因なんで、エルガーの「愛の挨拶」とサンサーンスの「白鳥」の二曲を、伊藤さんと懇意な植木園子さんのピアノ伴奏で弾いていただけることになりました。

伊藤さんが初めてチェロの手ほどきを受けた先生が、なんと同じシェア奥沢で開催された「クラシック音楽を楽しむ会」で解説をなさった山川純一さんの亡くなられた奥様だったことや、伊藤さんの実家がシェア奥沢から徒歩五分と、思いがけない偶然が重なってこの日のプログラムが実現しました。満員御礼だったこの日の参加者に素晴らしいチェロの音とともに英国編の映像がより印象深いものになりました。

（文責）岩崎 洋三

☆新会員自己紹介☆

新たに会員となった方の自己紹介です。

上田 須美子

数年の海外での生活を通じて、日本について学びたいという意欲が生まれ、今回入会させていただきました。明治維新により、武士の時代から一転、短期間の間に時代の変貌を遂げました。皆様のお話を拝聴し、現代社会の基礎を作り上げた時代を生きた人々の考え方を知り、心を感じることができたらと思っております。よろしくお

一八七三年・ウイーン・悪巧み二題

泉三郎

閑話を一つ。舞台は一八七三年、ウイーンで万国博覧会が開催された。それは華麗なるハプスブルグ王朝の皇帝フランツ・ヨゼフⅠ世の威光輝く大祝祭だった。岩倉使節団は六月三日から十六日間滞在し、ロシヤやドイツの皇帝、ペルシャの王様や各地から集まった賓客らに混じって万博を見物した。ドイツから帰国の途についた大久保や木戸を欠き十数人の小規模になっていたが、万博に出品するため佐野常民以下の数十人の一隊がやってきていて交流があった。

ある日、そのひとりが大使のホテルを訪ね、献上ものとして重箱に詰めた漬け物を持参した。書記官を通じて受け取った大使はそれを戸棚に仕舞ってお出かけになった。「和の味」に飢えていた書記官連は唾をのみこむ思いで一計を案じた。「あれをちょっといただいて一杯やろう」という悪巧みである。玄関番、見張り役、盗む役と決めて、いざ実行となったとき、突然大使が返ってきた、忘れ物をしたのだ。さあ大変！と思ったが間に合わない。バッチリ現場を押さえられてしまった。

その夜の会食時、大使がいった「今日、部屋に盗賊が入った！」、「ええ？それは大変！何か大事なものをとられましたか？」と副使の伊藤が問えば、「なに、たいしたものではない。背の高い奴がもっていった」と。そこで犯人は大酒飲みのひょうきんもの、安藤太郎、盗品は菜漬けと判明し一同大笑いになったという話である。

一方、そのころ、ヨハン・シュトラウスⅡは喜歌劇「こうもり」を作曲中だった。岩倉使節団が米国回覧中、ボストンの「平和大音楽祭」で指揮ぶりを視聴した、あのシュトラウスである。その「こうもり」は華やかな舞台で演じられる色事にまつわる悪巧みの物語である。そして、主人公アイゼンシュタインの名にはビスマルクの隠喩もあったりして、筋立ても巧妙、上演より百四十年経ってもなお人気が高いのである。

当会の新年会では、そのオペレッタのプチ・プチ版が演じられる。

歴史部会報

担当幹事　小野 博正
mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

■天下の双福と言われた男たち―福地桜痴（源一郎）と福澤諭吉（講師：大久保啓次郎氏）

十月二十二日開催。

天下の双福」と言われた福地桜痴と福澤諭吉。二人は幕末～維新を生きた同時代の人。諭吉が五歳年上。福澤の死の際に両者の人物が比較され「福地は才能においては福澤よりも優る。しかし、意思の強固さでは福澤が数段上である」と評された。

二人はどんな人生を歩んだのか？なぜ、福澤は後世に名を残し、福地は後世に忘れられる人になったのか？

いかに頭が良くても意思が強くないと人生は失敗すると云う事を二人の人生が物語る。二人に共通しているのは、学問に対する前向きな姿勢、しかし、意思の強さでは対照的であった。福澤は一夫一婦制に生きたが、福地は女狂いで、吉原や新橋など遊郭に足繁く通い身を持ち崩した。二人共、学校経営、新聞社経営、に携わるが、福地はすぐに経営に失敗し、他のことに邁進する。福澤は資金難の時代も乗り越え慶應義塾を存続させる。意思の強さの違いがはっきり出ている。

福地は晩年、事業に失敗した後に、歌舞伎座を立ち上げたり、文学での活動を行う。桜痴の「人生の歯車」はどこで狂ったのか？

今日、福澤諭吉は、一万円札の顔にもなっている事もあり、福澤諭吉の名前を知らない人は殆どいないであろう。

しかし、福地桜痴（源一郎）の名前を知っているか、知っていてもその人物について語れる人は少ないのではないか？早熟の才に恵まれ全盛時代には、大記者・新知識人として活躍した桜痴であり、その後の人生も決して世に埋もれていた訳ではない。それでいて、生前から忘れられた人として、遇されたのは何故か？

福地も福澤も幕末の洋行をはじめ、何度か人生の軌跡を交叉させている。どこで桜痴の「人生の歯車」が狂い二人は離れて行ったのか？「世に立つとは何か？　才能とは何か？　意思の強固さとは何か？」を、二人の人生を通して教えられたような気がする。

福澤諭吉の死に際して、福地桜痴が読んだ弔辞「旧友福澤吉君を哭す」は名文である。ここで福地は福澤の偉大さを称え自分の生き方を反省しているのが印象的である。

（大久保啓次郎）

■総合商社の源流・鈴木商店と記念館オープンについて（講師：小林正幸氏）

十一月十七日開催、出席者十六名。

双日総研の主任研究員小林正幸氏と、鈴木商店記念館副編集長の小宮氏をお招きした。今年の四月にバーチャル・ミュージアムとしてオープンした鈴木商店記念館は開館三か月で二十万人の閲覧者を数え、その内容の充実ぶりが、当会の二十周年プロジェクトの成果発信に参考にしようとの思惑もあり講演をお願いした。

神戸の鈴木商店が飛躍的発展を遂げたのは、社長の鈴木岩次郎が亡くなり、未亡人の金子よねが番頭の金子直吉に店の営業を全面的に任せたことに始まる。そのくだりは今年テレビ放映された『お家さん』（天海祐希主演）に詳しいが、財界のナポレオンとも呼ばれた、商才に長けた直吉は、日清戦争後の台湾合併後の樟脳、砂糖の需要に目をつけ大儲けし、次いで、第一次世界大戦には、投機的に鉄鉱、船舶、食料、綿織物などの輸出入に乗り出し大成功を収める。大正期には、三井、三菱を貿易額で凌駕するか、悪くても「天下を三分する」勢いであった。小麦百四十万トン、食料百万トン、船舶四十五隻とスエズ運河通行の10%は鈴木の船という時代もあった。

石油タンカーを日本で最初に建造し、満州から小麦、大豆を輸入し清水で始めた精油事業（豊年製油、共同油脂、日油）、薄荷（鈴木薄荷）、樟脳（日本香料薬品、日本精化）、セルロイド（ダイセル）、人絹（帝人）をはじめ、金属（神戸製鋼）、炭鉱（太陽鉱工）、発電、紡績（日本綿花、日商岩井＝双日）、煙草、塩（日塩）、ビール（サッポロビール）、焼酎、火薬、ゴム（ニチリン）、造船（石川島播磨）、石油（昭和シェル）など今につながる七十余の関連企業に発展したが、鈴木商店自体は、一九二七年に誤報に始まる米騒動に巻き込まれて経営破綻した。

日本の明治・大正時代のダイナミックな産業革命をリードしたのである。鈴木のバーチャル・ミュージアムは益々、日々進化しており、当会のホームページや岩倉使節団の人物論などのネット伝播に充分に応用可能だとの感触を得た。

（文責）小野 博正

鈴木商店記念館（左）・11月歴史部会（右）

グローバルジャパン研究会報告

担当幹事　塚本 弘
hiroshi.tsukamoto@eu-japan.jp

■企業で女性がキャリアを積むために…（講師：藤田薫氏）

十月十一日開催、出席者十四名）

講演者は企業の人材開発コンサルタントとして、二十数年延べ二千五百社の経営管理職の教育に携わって来た現役女性コンサルタント。

メッセージは、日本がグローバルな世界で存在を発揮し貢献するには、企業が「女性力」を活かすことが必須であること。そのため今、企業は、女性は、何に取り組む必要があるのか…を講師自身の体験キャリア（企業のサービ

ス現場→米欧亜のビジネス活動→MBA→NYで起業→管理者教育）や、後輩の女性達への想いも込めた講演となった。

◇前提　グローバル時代の今、企業では「日本人としてのアイデンティティを見つめ直し、強みは自覚し、変えるべき点は積極的に変革すること」が急務である。その顕著な例として、同質で排他的にも見える男性的な価値観の企業社会から「多様性、女性性を認め、活用する企業社会へ」のシフトが挙げられる。

具体的には「企業の経営管理職に女性を活用し、その視点・能力を活かすこと」と、事例を挙げながらの講演。

経営の緊急課題として、「女性脳（既成枠に捉われず新しいテーマに取り組む勇気・出る杭になれる強い意思と粘り強さ・倫理的な真面目さとテキトーを許容する柔軟性・幅広い対人構築力・顧客への共感能力等）の活用」を企業に迫っていること、その成功事例などを紹介。

◇一方、なぜ日本でそれが進まないのか？現状の日本では、高学歴の八百二十万人もの女性頭脳が未活用資源であり、経済回復の特効薬であるにも拘わらず、女性の登用が米欧亜諸国に比べ何故進みにくいのか。

背景には、日本が強い男女役割分担社会であったこと（特に企業社会）。女性は仕事を持っていても、役割として家庭・育児に軸足を置くことが暗黙の美徳とされてきたこと…必ずしも女性蔑視や差別からではなく、「社会の役割分担」という文化とルールにより意識無意識に「男の仕事」、「女の仕事」と分けられて来たこと。しかし今、一人ひとりに「その文化を切り替えられるか？」が問われている。

キャリアか家庭か？の二者択一ではなく、自分の能力を充分発揮し、充実した人生（キャリアも家庭も趣味も）を楽しめること。それには、今迄の経営管理職への王道＝長時間全国区労働を厭わず私生活を犠牲にする滅私奉公…といった暗黙の了解を消して、仕事は成果で評価されるものへと変えること。時短管理職や、エリア限定経営管理職もあり。そして成果に見合った報償制度や支援制度が伴うこと。しかし、制度が整っていても活用されにくい現状が問題。まずは所謂「オジサン中心のビジネス風土」を変えなければならない。

最後にこれからの日本企業の課題として、働き方を変え、男女ともに「仕事を楽しむ、組織マインドや愛社精神を持つ、人間力を磨く」こと。企業は「多様性を活かす風土づくり」を進めることと総括。参加者には管理職経験者も多く、共感異論色々続出。真剣に日本企業の未来を討論する時間となった。

（藤田薫）

＊事務局より＊
メーリングリストのご案内

二〇一六年に当会が設立二十周年記念を迎えることから、様々なイベントや企画が持ち上がっています。今後は、四半期に一度の会報ではお知らせが間に合わないことも多々あると思われますので、ぜひメーリングリスト用にメールアドレスを事務局の古俣までご連絡ください（FAX：042-534-9295）。数ヶ月前より、各部会の開催予定をひとまとめにしたお知らせメールの月例配信も始めました。リアルタイムでお知らせを受けられると何かと便利ですので、ぜひご登録を。ご家族様のメールアドレスでも結構です。

■新しい教育を目指して―中高一貫教育実験物語―（講師：高橋正尚氏）

十一月八日開催、出席者十七名。

今回は講師が校長を勤める横浜市立南高等学校付属中学校から要請を受けて去る九月、同校の中学生二・三年生を対象に歴史の授業の一環として泉理事長が岩倉使節団について講義を行ったご縁で高橋校長先生に中高一貫教育の実験物語を語って頂いた。

同校の教育目標は学びへの飽くなき探究心を持つ人材の育成・自ら考え自ら行動する力の育成・未来を切り開く力の育成などを掲げ国際社会で活躍するリーダーの育成を目指している。中高一貫教育の最も大きなメリットである時間的ゆとりをグローバルな人材育成の為に様々な試みの挑戦に活用されている。

同校では六年間の総合的な学習時間を「ＥＧＧ」（Ｅｘｐｌｏｒｅ＝さがす・学びの探求、課題さがし　Ｇｒａｓｐ＝つかむ・自己の可能性の発見、他者との学びによる確かな理解　Ｇｒｏｗ＝のびる・最終的な人間性の成長）と言う愛称で呼んでいる。教室でのカリキュラムに基づく授業以外にＥＧＧの三本柱としてＥＧＧ体験・ＥＧＧゼミ・ＥＧＧ講座を用意し「豊な心」「高い学力」を育成し、自分の力で将来を切り拓く力を育てることに力を注いでいる。一例を挙げれば

＊ＥＧＧ体験：プロジェクトアドベンチャー足柄・コミュニケーション研修・夏季英語集中研修・御殿場イングリッシュキャンプ・カナダ研修旅行など

＊ＥＧＧゼミ：一年生は基礎力養成・二年生グループ研究・三年生卒業論文

＊ＥＧＧ講座：必修講座（消防士による防災講座・弁護士による法教育講座・横浜市大国際理解講座・ＪＡＸＡ宇宙開発講座など）選択講座（東大海中ロボット講座・横浜市大医学部体験・富士通パソコン分解講座・ＴＢＳ出張スタジオ（ニュース番組づくり講座）等々、合計で二十二講座を用意し、相当充実した内容になっている。

「本物の体験を重ねることで、学力だけでなく教養と人間性も磨かれる」と高橋校長先生は語る。気になる学力については民間教育機関の学力検査、適性検査、各種検定などの積極的活用を通じて学力向上に積極的に取り組まれ、Ｚ会アドバンストテストや英検，数検などでもかなりの好結果が出ている。将来の大学受験という舞台で必ずや大きな花を咲かせてくれる事が高橋先生の熱き思いで語られるお話から推察された。

「大学受験は一つの通過点と考え大学でもしっかり力を付けて社会に貢献できる人材として成長を願っています」とお話を締めくくられた。

（文責）畠山朔男

実記を読む会報告

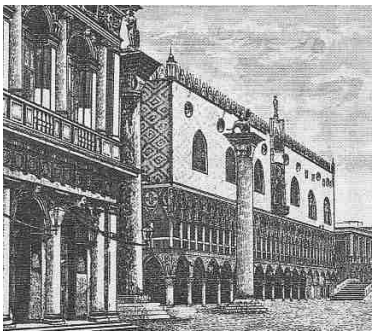
担当幹事　小坂田 國雄
Tel&Fax 044-987-1531
osakadakunio5256@jcom.home.ne.jp

■第百八十六回

十月九日開催、イタリア、七十七章、ナポリ、七十八章、ベニス

一八七三年五月、旧ナポリ王国の離宮のあったカセルタを経てナポリに入る。当時のナポリはイタリア一の大都会で四十四万人（ローマは二十二万）。しかし、人は無学で懶惰、貧民は地上に臥し臭気鼻をうつ状態。欧米十二カ国を巡った中で最悪なること支那の上海に同じ、とバッサリ。もっともその九十年前に旅したゲーテは「ナポリは天国だ。あくせく働かない者を無為の徒と考えたがるのは、北国の考えだ」と理解を示している。

一行はフィレンツェ、ローマ、ナポリと南下するごとに南北格差を痛感したようだ。



ヴェネツィアの旧政庁（実記）

ポンペイを訪れ、妓楼址や猥褻画をしっかり見ている。再び北転し、途中のパドバで、当時の両国の主要産業たる養蚕に綿密な考察を加えつつベニスに入る。この街こそ中世から岩倉の時代、そして現代と全く姿を変えない奇跡の街だ。古文書館で支倉使節の文書を紹介され、数百年前の東西交流に驚くのである。大友（天正の四少年）使節と混同している節もあるが、、。

本文をはなれて、㈠支倉使節、㈡天正の四少年使節、㈢ペドロ岐部の単独行（ペルシャ、砂漠、エルサレム、ローマ、アフリカ、、）を比較。さらに、㈠コルテスのアステカ・マヤ侵攻（モンテスマ王の無策）、㈡ピサロのインカ略奪（アタワルパ王の優柔不断）にくらべ、ザビエル以降の西欧勢力に日本がどのように対応したかを考えた。

そしてイタリアのリソルジメント（再興）と明治維新の過程で、それぞれの三傑、㈠ガリバルディ、㈡カブール、㈢マッティニー、と㈠西郷、㈡大久保、㈢木戸　がその性格、役回りで見事に類似しているのがおもしろい。また「イタリアから日本を考える」と題して、領地の喪失・確保、君主の地位（イタリアは人民の意思）、植民地獲得の無理、ファッショ化の過程、二次大戦の終わり方（責任の取り方）、新憲法（ともに戦争の否定をしているが、イタリアは防衛の義務、兵役の義務を明記）、最近のテーマとして原発対応（イタリアは一九九〇年以降、国民投票でゼロ決意）国民性の指標としての自殺率（十万人あたり日本が二十一人なのに対して、イタリアは六人とぐっと少ない。）アモーレ！マンジャーレ！カンターレ！　恋して、うまいものを喰って、唄を楽しくうたおう！ということであろう。どちらも火山国であるが、、。

さらに、イタリアが世界の文化に貢献した　㈠ルネッサンス以降のイタリア美術史、㈡戦後イタリア・レアリスモからスタートする素晴らしき名作映画（ロッセリーニ、デシーカ、ヴィスコンティ、フェリーニなど）をポスター、図像をみながらみんなで楽しんだ。（芳野健二）

■第百八十七回

十一月十三日開催、79～81章オーストリア・ウィーン・ハンガリー

オーストリアを訪問したのは、長期に亘った米欧回覧の最終月の約二週間である。その七年前には、ドイツの盟主であったオーストリアがビスマルクのプロシャと争って敗れ、翌年には属国ハンガリーの自治を認める妥協を余儀なくされ、オーストリア・ハンガリー帝国という二重帝国（同君連合）になっていた。

また、滞在したウィーンは、オスマン帝国による大包囲に耐えた市壁を取り壊し、リングシュトラーセを中心とする都市大改造が一八五八年から進んでいた。そして、その仕上げともいうべきウィーン万国博覧会が、訪問の一ヶ月前から始まっており、日本館が大人気で街中に扇子や団扇が氾濫するほどジャポニズムが広まっていた。しかし、万博開幕直後にバブルがはじけて、ウィーン証券市場が大暴落し、大恐慌を来たす不運にも見舞われていた。

その様な時期の使節団について、二〇〇一年・国際シンポジウムに招いたボン大学のペーター・パンツァー教授の講演、「米欧回覧実記に登場すること、しないこと」を紹介した。主な指摘は以下の通りであるが、ものの見方の違いが分かって大変興味深い。①文明の発展とは結びつかないのに、驚くほどの熱意で詳細な風景描写をしている。（日本人の自然愛か？）②女性テーマの記述がごく少ない。（日本人の女性観か？）③皇帝主催の歓迎大晩餐会で岩倉大使の隣に座った皇妃エリザベートは、美人の誉れ高く、百三十年後のイギリスのダイアナ妃に劣らぬ人気があったのに、触れていない。④後に伊藤博文が明治憲法制定準備のため訪欧し私淑したウィーン大学の著名な憲法学者シュタイン教授に使節団も会っている筈なのに、面会の記録がない。等々。

なお、当会の来年の新年会は、ヨハン・シュトラウスの喜歌劇『こうもり』がテーマになったが、主人公のファルケは鷹＝鷲でハプスブルグ家を、敵役のアイゼンシュタインは鉄鉱石でプロシャの鉄血宰相ビスマルクを暗示していて、普墺戦争の恨みをオペレッタで果たす『復讐劇』の意味も隠れていて面白い。（岩崎洋三）

■第六回

十月十五日開催、Chapter VI　Official Visit to Yedo

東禅寺の哨兵と伍長の殺害事件（第二次東禅寺事件）を討議するために、ニール大佐（イギリス代理公使）は、護衛兵と公使館員を引き連れて江戸へ向かった。

公使館にあてられていた建

Sir Ernest Satow,
A Diplomat in Japan 輪読会
担当幹事　岩崎洋三
Tel &Fax 03-3488-0532
y-iwasaki@isr.or.jp

物は、高輪の町はずれの、東禅寺の一部であった。公使館の永久的な建物をつくるための談判が長い間行われていた。御殿山という絶好の敷地が決まり、イギリスの設計、ただし費用は将軍の政府持ちで、完全な建物数棟がその地に造られていた。この建物が完成し次第、イギリスの国旗が江戸の空に再び掲げられるはずだったので、活気のあふれる期待の感情をもって竣工の日を待ちわびていた。

江戸に到着した二日目に、老中を訪問した。日本で厳格な習わしとなっている天候や健康に関する一応の挨拶がすむと、薄青い麻の外衣（裃・かみしも）をまとった侍が、二列に並んで、カステラと羊羹を盛った黒漆塗りの箱を、また、そのあとから蜜柑と柿を盛ったのを、目高に捧げながら入って来た。オランダ語と英語を話す当方の通訳と、日本語とオランダ語を話す先方の通訳との間で会話のやりとりをするので、会談の進行はまことに遅々としたものだった。主要な討議の題目は、東禅寺の哨兵と伍長の殺害事件であった。賠償金の額の隔たりは大きく、その日の会見では、何一つ解決を見なかった。

二月の初めになって、御殿山の公使館の建物が同月一日の夜（一八六三年一月三十一日＝文久二年十二月十二日夜の誤り）焼失したという知らせをうけた。その後幾年かたって、伊藤博文、井上馨ら攘夷党の長州人の仕業であったということを聞いた。

以上がサトウの日記の概要である。しかし、萩原延壽の「遠い崖」等の参考文献によると、日本側がのらりくらりと外交交渉するので、イギリス本国のラッセル外相はしびれを切らして、アームストロング砲を江戸城に向かって撃つなどの強硬手段を訓令で伝えてきたりしていた。しかし、ニール代理公使などは強硬手段は決して得策でなく、何とか円満に解決しようとしていた。幕府側の交渉担当者は、アヘン戦争などイギリスの武力に訴えるやり方も頭に入れ、多分、イギリスの武力に慄きつつ、羊羹や果物を裃をまとった侍が様式美を感じさせるやりかたで提供し丁重に接待をし、二枚腰三枚腰で交渉をしている。

当時は江戸では危険なので、横浜に外国人たちは居住していたが、この人達を警護する為に、幕府は旗本・御家人の子弟を二千人から三千人動員していた。幕府の気の使い方は相当なものだった。サトウの日記には書いていないが、高杉晋作も御殿山の公使館の焼打ちに加わっている。

（小坂田國雄）

■第七回

十一月十九日開催、出席者九名。第7章 DEMANDS FOR REPARATION - JAPANESE PROPOSAL TO CLOSE THE PORTS-PAYMENT OF THE INDEMNITY (1863)

輪読後、同章に関して感じた以下の疑問点、即ち、英国が東禅寺事件と生麦事件の賠償金として要求した十一万ポンドは現在の価値でどのくらいの金額になるのか：幕府は全額貨幣（コイン）で支払ったが、どの通貨なのか（本文に記述がない）：小笠原図書頭長行がフランス代理公使に英国との仲裁を頼んだ際、同時に鎖港提議の内容を伝えたため、フランス側から仲裁役引受けを断られたと述べられているが、フランスが英国の利益を損なうための工作を何もせずに単に幕府に賠償金支払いを勧めるものであろうか、等について出席者にご検討いただいた。

当時の交換レート、一ポンド＝四ドル、一ドル＝3/4両をもとに現在の価値に直して約22～30億円がレアル銀貨（メキシコドル）によって支払われたと考えられる。フランスが策を弄したか否かについては不明であるが、英国側に生麦事件の被害者にも非があったとする見解があったのは確か、という結論に至った。

最後に、ケンペルの『日本誌』がSatowの見解に与えた影響について英訳本をもとに検討した結果の中間報告と、明治十一年（1878年）に日本を旅行したイザベラ・バードについて、彼女の著書『日本奥地紀行』の秋田県北部地域の旅程の紹介を行った。

（樫原　知子）

関西支部報告

担当幹事　難波 康熙

namba@jttk.zaq.ne.jp

■第七十六回

九月二十一日開催、第40巻ロンドン市後記

晩秋のロンドンの霧の日が続く中、最後まで精力的にビスケット工場、農業用種子会社、コークスガス会社、その上海軍病院などの海軍施設なども視察する。

使節団にとっては英国産業の工業生産力は仰ぎ見るような存在であり、その「営業力（調達した原料から付加価値の高い工業製品を作り、貿易利益を獲得する）」には目を見張った。しかし、使節団が英国を訪れた1872年は、英国は工業生産品を世界に売る「自由貿易主義」から、インドなどの植民地を直接経営し市場としても囲い込むという新しい帝国主義に政策を転換した時でもあった。締めくくりに、「内部ノ政治、国民ノ景況ニ於イテハ、未タ我ニ緊要ナル所をミス」と、英国から強烈な衝撃を受けながら、自らの視点で取捨選択しようとするこの姿勢こそが、明治維新を成功させた秘訣であろうと考える。

■第七十七回

十月二十六日開催、第40巻ロンドン市後記

英国について全体を振り返えり日本と対比することで「比較史のような視点」で、また英国が世界に与えた影響として「グローバルヒストリーの視点」で『総括』することを試みた。

日本は、大陸から距離を保ちつつ、選択的に文化や文明の摂取が可能であった。一方、英国は大陸から直接的な影響を受ける距離にあり、波状的に大陸から種々の民族の侵入と支配を受けるといった点で日本の歴史との大きな差をもたらした。

後半は「捏造された事実」による外交情報戦敗北の教訓と、これが結局は太平洋戦争の道に繋がったことの教訓を考える材料として、ＮＨＫ「国際連盟脱退と宣伝外交の敗北～偽書・田中上奏文（タナカ・メモリアル）」を観て話しあった。（難波 康熙）

特定非営利活動法人

「米欧亜回覧の会」ご案内

趣　旨　この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。

会　員　趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例　会　年に4回、全体例会があります。

部　会　テーマ別に読む会、歴史部会、グローバルジャパン研究会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

機関紙　年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

役　員　理事長（泉三郎）他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

会　費　年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、仮入会希望者、学生には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。

事務局　「米欧亜回覧の会」事務局担当 古俣美樹
〒190-0001
東京都立川市若葉町 1-24-30-7111
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL/FAX 042-534-9295

入会申込

入会申込書はホームページと事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。
なお年会費などのお支払いは下記のゆうちょ銀行口座への払込（振込）をご利用ください。

00180-2-580729　特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ 等
また、書籍・ＤＶＤ案内もあります
http//www.iwakura-mission.jp
＊お知らせ欄も時々チェックしてください

＜催し案内＞

2015年1月～3月の予定です

☆2015年新年会

日　時：1月10日（土）12:30～14:30（開場12時）
Ｊ・シュトラウス２世のミニオペレッタ上演！
場　所：日本外国特派員協会（外国人記者クラブ）
ＪＲ有楽町駅前電気ビル北館２０階
03－3211－8171
会　費：8,000円（学生4,000円）
家族割引（お2人目より）6,000円

☆実記を読む会

日　程：1月 8日（木）小野氏「第82、83巻」
2月12日（木）芳野氏「第84、85、86巻」
3月12日（木）小坂田氏「第87、88巻」
時　間：14:00～
場　所：国際文化会館401号室
会　費：1,000円

☆Sir Ernest Satoh,A Diplomat in Japan輪読会

日　程：1月21日（水）14:00～ Ch.7　大森氏担当
2月18日（水）14:00～ Ch.8　長島氏担当
3月18日（水）14:00～ Ch.8　岩崎氏担当
場　所：日比谷図書文化館
会　費：1,000円

☆歴史部会

日　程：2月16日（月）13:30～16:30
テーマ：西郷隆盛と福沢諭吉（大久保啓次郎氏）
場　所：国際文化会館404号室
会　費：1,000円

☆グローバルジャパン研究会

日　程：2月14日（土）13:30～16:30
テーマ：仏教説話入門―燃燈仏授記物語から見る仏教思想史―（松村淳子氏）
場　所：国際文化会館401号室
会　費：1,000円

☆i-café-music 最終編

日　程：1月17日（日）
テーマ：第４回　露・伊・墺・瑞士・亜
場　所：シェア奥沢　世田谷区奥沢 2-32-11

編集後記

◇二〇一四年最後のＮＥＷＳ発行となります。今年の四号とも新会員自己紹介を掲載することができ、着実に新しい会員が増えつつあります。今号の自己紹介は一名でしたが、多忙で自己紹介を辞退される方や、準会員ということで躊躇される方もいます。遠慮せずに気軽に自己紹介文をお寄せください、歓迎いたします。

◇新年から、設立二十周年事業を視野に入れたi-Project・20が、いよいよ本格的に動き出します。先行する新プログラムが順調に広がりをみせていますが、使節団や『実記』をもっと広く知ってもらい、会員増につなげるi-Café-musicとi-Café-lectureは、当会のＰＲが趣旨で、コラボレーション先の動員で満席状態となり、まだ、参加したことがない会員の方も多いと思います。

◇二〇一五年の新年会は、岩倉使節団とゆかりの深い、ヨハン・シュトラウス二世の喜歌劇「こうもり」の本格的なミニ・コンサートの上演があり、いわば、「盛大なi-Café-music」といえます。多くの方が参加して、ワインや料理とともに、i-Café-musicの本格さと楽しさを体験してください。（N）